

# 屋久島のエコツーリズム

— ガイド業者に対する調査から —

田 島 康 弘

(2003年10月16日 受理)

Eco-tourism in Yaku Island, Kagoshima Prefecture

TAJIMA Yasuhiro

## Abstract

This study discusses the eco-tourism in Yaku Island, Kagoshima prefecture.

The concept of eco-tourism is presented, and three main elements are dealt with : 1) the protection of nature, 2) the establishment of tourism and 3) the development of the local economy.

Interviews were conducted to clarify the facts of eco-tourism in Yaku Island. There are 29 eco-tour guide members in the Yaku Island tourist association, 18 of whom gave answers. Many of them lived in Yaku Town especially near Anbo district. Most of them are men in their 40s or 50s ; three quarters of them were not born on Yaku Island. Some of these guide members had contracts with major Japanese tourist companies ; others found business through their internet homepages.

Finalles, the problems of eco-tourism on Yaku are discussed, including the limitations of tourism for protecting nature, and the improvement of status. One future direction of eco-tourism on this island will be the contribution to green tourism, although this has been limited so far. Some guides who were not born on the island are not always supported by the local people. This is another problem of eco-tourism in Yaku island.

**Keywords** : ガイド業者, 自然保護, 地域経済, グリーンツーリズム, 島外出身

## 第1章 研究目的

2000年秋の日本地理学会鹿児島大会で屋久島巡検を担当し、この島の新たな動きを知るようになってから、屋久島へのかかわりが強くなってきた。

2000年夏の人文地理学野外演習でも屋久島を選択し、近年の新たな来島者について学生と共に勉強した。

鹿児島大学多島圏研究センターの薩南諸島のプロジェクトでも屋久島について担当することになり、外国人向けの屋久島の紹介を行った(TAJIMA, 2001)。そして本研究は同じく多島圏研究センターのプロジェクト「多島域における小島嶼の自立性」の一環として行なわれるものである。

他方、筆者は「社会地理学」なるものを専門としている。社会地理学とは社会の構造や動向を「空間」とのかかわりで解明する学問であるとされるが、現代社会が提起する諸課題に答える地理学を創造しようとする地理学内の一潮流と言い換えることもできるであろう。空間視点を生かしつつ、現代的課題に答えようとするのが社会地理学の目指している方向であると言えよう。従って、問題をよりリアルに把握し、かつ、空間認識を得るためにも現地調査は不可欠で、学生の野外演習でも2001年度は川辺町、2002年度は宮崎県綾町を選定し、「環境と町づくり」というテーマの下にフィールドワークを行って来ている。

ところで、近年屋久島では屋久島のこれからの進むべき道(方向)としてエコツーリズムが注目されている。前述の2000年の日本地理学会の屋久島巡検においてもエコツーリズムは中心テーマの1つであった。

本稿はこのエコツーリズムについて、屋久島の実態に即して検討しようとするものである。はじめにエコツーリズムの概念について若干の整理をしておきたい。次に、屋久島のエコツーリズムの担い手としての「ガイド業者」に注目し、この実態を明らかにしつつ、エコツーリズムをめぐる諸問題について検討することにしたい。

## 第2章 エコツーリズムの概念について

### 1. エコツーリズム推進協議会の定義

エコツーリズムという言葉は国際的には1970年代頃から使われ出したと言われ、日本では1990年に環境庁がエコツーリズムを提唱することで使ったのがはじめとされている。

エコツーリズムとは何か、については様々な議論が展開されてきた経緯があるが、1998年に設立された日本エコツーリズム推進協議会<sup>1)</sup>によりまとめられている定義が、現在のところ最も妥当なものであると思われる。そこで、やや長くなるが、まず、これを紹介することにしたい。

「エコツーリズムの概念は資源の持続なくして観光は成立せず、地域住民の参画なくして資源は

守れず、経済効果なくして住民の参画は望めずという3つの認識の上に成り立つ、観光産業と自然保護、地域振興の歩み寄りと融合のかたちである。(中略) エコツーリズムの目的は、その波及効果によって地域の暮らしがより豊かになること、地域の資源が守られること、訪れた観光客に自然や文化と触れ合う機会が提供されることである」(海津・真板, 1999)。

この定義は、1) 自然保護、2) 観光の成立、3) 地域経済の活性化の3つを柱にしており、自然の保護を基礎に観光活動を成立させ、これらの活動を地域経済活性化につなげるものと言うことができよう。

## 2. 海外での定義

ところで海外においてはエコツーリズムはどのように考えられてきたのであろうか。

有名な定義としてしばしば紹介されるものに、エリザベス・ブー<sup>2)</sup>とラスクライン<sup>3)</sup>の定義があるので、これらを紹介して考えてみたい(国際観光振興会, 1992)。

「地域特有のあらゆる文化とともに、植物や動物を見たり楽しんだりする目的を持った自然公園やその他の自然地区を訪れること」(エリザベス・ブー, 1990)。

「地域の(過去と現在の)文化的特色や、そこで見ることのできる景観や野生の動植物を観察、学習、楽しむことを目的とする、比較的乱開発されていない自然地域への旅行」(ラスクライン, 1993)。

これらの定義に関する論点は以下の3点であろう。

- ① エコツーリズムという言葉は自然や生態を内容とする観光であるという意味であるにもかかわらず、両者とも観光の対象として「文化」を入れていること。
- ② 自然保護の考え方が入っていないとは思わないが、直接的には述べてはおらず、「自然公園」とか「比較的乱開発されていない自然地域」という言い方であって、やや自然を保護するという内容が弱い気もすること。
- ③ 両者とも「推進協議会」の定義の3本柱の1つである「地域経済」の要素が欠落していること。

以上、検討した2人の定義は「自然環境サイドからの定義づけ」であるとも言われる。これに対して、「観光事業関係サイドからの定義づけ」と言われるものがあるので、これを次に紹介したい。その1つは米国旅行業協会によるものであり、もう1つはオーストラリアのエコツーリズム協会が定めるものである。

「エコツーリズムは、環境との調和を重視した旅行、即ち野生の自然そのものや環境を破壊せずに、自然や文化を楽しむことを目的としている」(米国旅行業協会)

「エコツーリズムとは、観光を通じて環境ならびに文化的な理解を深め、その与えてくれるものへの感謝とそれを保護することを促進し、生態環境的に持続していく観光産業をさす」(オーストラリア、エコツーリズム協会)

両者とも観光の対象に「文化」を含めていることは、先に検討した2名と同様である。また、「地域経済の要素が欠落している点も、先の2名と同じである。ただ、自然保護に関しては「環境との調和」とか「環境を破壊せず」としたり、「それ（環境や文化）を保護する」と述べていて、より明瞭であると言えそうである。

以上、若干の海外でなされている定義を見たが、エコツーリズムの概念の内容として、自然保護を柱とし、文化をも観光の対象として含めること、さらに、地域経済の内容が欠落していたことが共通していたと言えよう。ただし、ラスクライン氏は、氏自身の後の定義では「地域住民に利益をもたらす」という内容を含めた定義を行っており、地域経済について考慮していることも付け加えておきたい。

### 3. 日本での定義

ここでは先に見た推進協議会の定義以外のものを検討しておきたい。すなわち、1つは日本自然保護協会の定義であり、あとは真板昭夫氏および吉田正人氏の見解である。

#### 1) 日本自然保護協会<sup>4)</sup>の定義

この協会はエコツーリズムを次のように定義している。

「旅行者が生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態」（日本自然保護協会、1994）。

この定義の特徴は、まず、文化をもエコツーリズムの対象とし、自然や文化の保護及び地域経済への貢献をあげている他、「環境教育」の要素を含めているところにあるものと考えられる。

#### 2) 真板昭夫氏<sup>5)</sup>の見解

氏はエコツーリズムの第1のキーワードとして「環境保全への参加意識の育成」をあげたあと、第2のキーワードとして「地域主義の育成」をあげている。この地域主義の育成について氏は次のように述べている。

「エコツーリズムは地域の自然、文化、歴史などの価値を再発見し、地域の自主性、自立性によって多様性をもった旅行商品を旅行者に提供し、追体験させていく中で地域のすばらしさに感動し、気づいてもらうことである。そしてこの行為を通じて、住民自身が地域の個性と価値に気付き、未来の地域創造につなげていこうとする、旅行者をも巻き込んだ地域復権の推進運動といえる」（真板昭夫、1999）。

氏は、地域の個性や多様性の価値を軸にした住民自身による地域づくりという内容をエコツーリズムは持っていると考えているようである。

#### 3) 吉田正人氏<sup>6)</sup>の見解

氏は、1992年ベネズエラで行われたエコツーリズムのワークショップ<sup>7)</sup>の基調講演での内容

に対し、3つの項目を付け加えることを提案している。

基調講演でなされたエコツーリズムの定義の内容は、①自然への影響を最小限にした旅行、②地域住民に利益をもたらす旅行、③自然を敬い、自然を観察し、自然から学ぶ旅行というものであったが、これに対して氏は、①優れた指導者が案内する旅行、②自然とともに生きる人々の生活から学ぶ旅行、③地域住民が上からの開発でなく、内発的發展を実現できることの3つをエコツーリズムの定義に加えることを提案している（吉田正人、1992）。

さらに氏はこの会議に参加した「先進国の参加者がエコツーリズムを、保護地域を守るための方法（エコロジー）と定義し、いかに観光開発や旅行者を管理制限するかが問題であると考えているのに対し、開発途上国の参加者は、保護地域を持続的に利用するための方法（エコノミー）と考えていることが浮き彫りになった」として双方の立場の違いについて触れている。

さらに、ベネズエラの参加者から、「エコツーリズムから利益を得るのは誰か、実際には多国籍企業ではないのか」とか、「住民が利益を得るのは、果たして良いことなのか、伝統的な文化が壊され、観光依存型の経済になってしまうのではないか」などの疑問が出されたことに言及している。ここには、私達が深く考えてみるに値する重要な問題提起がなされているのではなかろうか。

#### 4. まとめ

以上、エコツーリズムの定義をめぐる様々な見解を検討してきた。現段階で推進協議会による一定の整理がなされているとは言え、地域経済の活性化とか地域経済に対する貢献とかの内容やその具体的な実践はまだまだこれからの課題であろうと思われる。

グリーンツーリズムの実践やこれとの結合ということかも知れないが、この道筋は未だ明らかになっていないと言えないであろう。また、このことは地域における民主主義のあり方とも関連した地域社会全体の問題なのかも知れない。さらなる検討がなされねばならないだろう。

### 第3章 屋久島におけるエコツーリズムの実態

#### 1 調査の概要

2001年12月20日～24日、筆者は屋久島でガイド業者を対象とした面接聞き取り調査を行った。対象となるガイド業者の数は数十名とか50～60名とか言われていたが、はっきりした数はどこも把握していなかった。

そこで筆者は屋久島観光協会の会員の中のガイド業者を基本とし、非会員についてもできるだけ捉える努力をして、調査を進めた。観光協会のガイド業の会員は、団体会員と個人会員（登山ガイド）の2つに別れており、団体会員が17名、個人会員が12名となっている。これらの会員を対象と

して、筆者は面接による聞き取り調査を行い、結果的には、団体会員17名中の11名(64.7%)、個人会員12名中の7名(58.3%)、あわせて29名のうちの18名(62.1%)の結果を得ることができた。また、この時点で存在がわかつた非会員5名のうち1名については調査することができたので、調査した業者の総数は19名となった。

以上の調査により、主要な団体会員については、ほぼ結果を得ていることなどから、この結果により、基本的な傾向は把握することができるものとする。

調査の内容は19の質問項目と自由意見であるが、この具体的な内容は調査結果のところで示すことにする。

## 2 調査結果

調査の全体は、1)客観的事項の部分、2)被調査者の意向や考えを尋ねた主観的な部分の主に2つからなり、これ以外の筆者との会話の中で述べられた事柄等を、3)自由意見の部分という形で整理した。

### 1) 客観的事項の部分

#### (1) ガイド業者の所在地(図1)

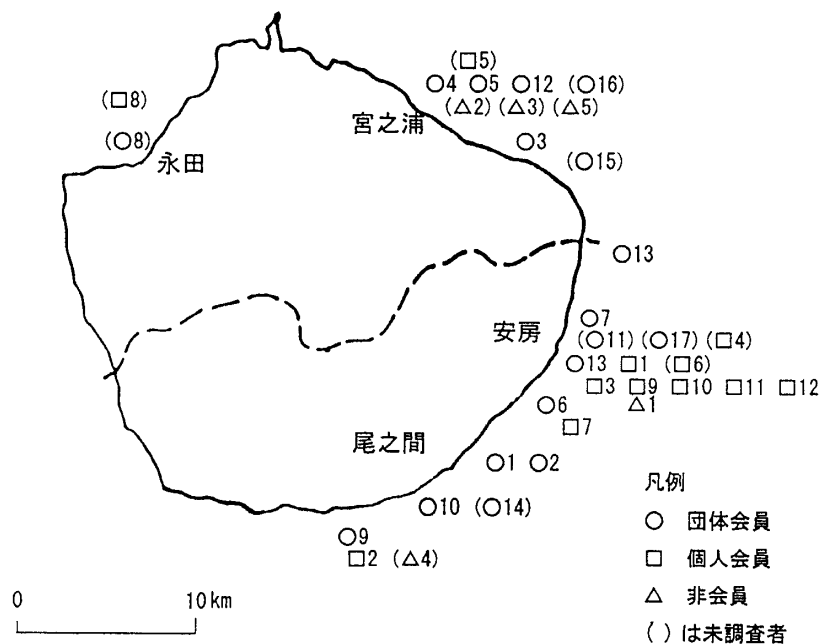


図1 ガイド業者の居住地

はじめに、観光協会の団体会員と個人会員及び現在わかっている非会員の所在地を示す。ここには調査した業者のみでなく、調査ができなかった団体会員6名、個人会員5名、非会員4名の所在他も記入した。

全体としてみると、ガイド業者は南の屋久町に22、北の上屋久町に12で屋久町側に多く、

とくにその中心地安房に13と最も集中していることがわかる。次いで宮之浦に8業者がおり、このほかでは原，小島，平内などの屋久町側の各集落が目立っている。

ただ，この所在地は団体の場合はその代表者の所在地であり，その団体に所属する各ガイド個人の居住地ではないという点の注意が必要であろうが，大まかな傾向は理解できるであろう。

(2) ガイド業者の年齢・性別（表1）

ガイド業者の年齢をみると，40～50代の働き盛りの者で7割近くを占めていて，最も多いことがわかる。ただ団体の場合は代表者の年齢であり，各団体に所属するガイド人の全体では，これより若くなることが予想される。なお，以上の19人のうちでは女性は1人のみであった。

表1 ガイド業者の年齢

年齢	団体会員	個人会員	計	割合(%)
60歳以上		2	2	10.5
55～	2		2	10.5
50～	2	3	5	26.3
45～	5		5	26.3
40～	1		1	5.3
35～	1	1	2	10.5
30～		1	1	5.3
25～	1		1	5.3
計	12 <sup>※</sup>	7	19	100.0

注) 1名の非会員のデータは、プライバシーを考慮して団体会員に含めて扱うことにした。以下の表も同様。

(3) 出身地（表2）

ガイド業者の出身地をみると島内出身者は4分の1強にすぎず，4分の3が島外出身者である。島外で多かったのは関西の4分の1強であった。エコツーリズム関係者で島外出身者が多いことは，屋久島の大きな特徴であるといえよう。

表2 ガイド業者の出身地

出身地	団体会員	個人会員	計	割合(%)
東 北		2	2	10.5
中 部	2	1	3	15.8
近 畿	4	1	5	26.3
中・四 国	2		2	10.5
九州・沖縄	1	1	2	10.5
屋 久 島	3	2	5	26.3
計	12	7	19	100.0

(4) 屋久島来島年及びガイド業開業年（表3）（表4）

次に，島外出身者14名の屋久島への来島年をみると，1990年代以降が6割近くを占めて最も多い。しかし，80年代以前も42.8%と少なくない。これに対し，ガイド業の開業年をみる

表3 ガイド業者の来島年

来島年	団体	個人	計	割合(%)
1960年代	1		1	7.1
1970	2		2	14.3
1980	2	1	3	21.4
1990	4	4	8	57.1
2000				
計	9	5	14	100.0

表4 ガイド業者の開業年

開業年	団体会員	個人会員	計	割合(%)
1970年代	1	2	3	15.8
80年代	2		2	10.5
90～91			0	0.0
92～93	2		2	10.5
94～95	3	2	5	26.3
96～97	2	1	3	15.8
98～99	2		2	10.5
2000～01		2	2	10.5
	12	7	19	100.0
不明	6	5		
計	18	12		

と、80年代以前は26.3%と低く、全体の約4分の3が90年代以降に開業しており、94～95年が最も多くなっている。これ以降も開業は続いた。

すなわち、開業のピークは1994～95年であり、島外者の来住はこれより数年早いということが平均的には言えそうである。

屋久島が世界遺産に指定されたのは1993年であり、この指定がガイド業者の増加を促進した結果となっている。なお、80年代の2つはいずれも80年代末でトッピーの就航により入込客が増加する頃である。ガイド業に対する要請が1つの転機を迎えた時期と言えよう。

#### (5) ガイド者総数

ここで、ガイド者の総数について推測してみたい。とくに団体会員の場合は1団体の下に数人、多い場合は10人を超えるガイド者が加盟、契約しており、ガイド者の総数ははるかに多くなっているからである。

筆者が行った調査の結果によれば、ガイド者数は、団体会員の延べ人数が66名、個人会員の延べ人数が7名、非会員の延べ人数が4名となり、合計77名という数字になった。しかし、この数字については次の2点を考慮する必要がある。その1つは未調査の部分がこの数字には含まれていないことで、その内訳は前述したように団体会員6、個人会員5、非会員4であり、さらに、筆者が把握していない非会員が存在することも考えられるという点である。もう1つは、この77名は述べ人数であって、1個人が複数の団体会員に所属していることがあることである。また、観光協会の個人会員も団体会員に所属または契約していることがむしろ一般的である。

前者の未調査部分が欠落しているということは実際のガイド者数は77より多くなるという要素であり、後者の同一ガイドが重なって数えられているということは77より少なくなるという要素であって、両者を合わせて考えるとガイド者総数は全体としてはほぼこの77名程度の数であろうことが推測される。

#### (6) 開業の動機

開業の動機は人によってみな異なっており、きわめて多様であることが特徴である。こうした中で複数のガイドがあげた動機をみると、「自然相手の仕事がしたかった(3人)」、「遭難者の救助がきっかけで(3人)」、「真の屋久島を見てほしかったので(2人)」の3つであった。これ以外では「ガイドの窓口が必要だった」「土地購入者のサービス」「ガイドの質の向上」「海と山の総合ガイド」「数不足」「島民によるガイド」「友人の案内がきっかけで」「考え方の対立から」「人に勧められて」「親が山に詳しくかった」「宿泊業だけではやってゆけなかった」「旅行会社に勤めていた」などで、個人的な理由が多いと言えよう。

#### (7) 以前の職業

ガイド業を始める前の職業を会社員、公務員、自営業という分類で分けると、会社員8、公務員3、自営業8で、会社員や公務員のサラリーマンがやや多かったと言えよう。会社員



の内容は観光会社、旅行会社、タクシー会社、林業会社などガイド業と関連した業種もあったが、会社のデザイン部門とか電気技術者など、ほとんど関係のない分野の者もいた。公務員は教師や役場の職員である。自営業では、複数であったのは園芸・造園業のみで、あとはダイビング店、みやげ物店、スナック経営、林業関係、カメラマン、不動産業などであり、ガイド業と関連するものが多かったと言えよう。全体として前職では、ガイド業に関連した職にあった者がやや多いと言えるであろう。

以上、主にガイド業者自身のことについてみてきた。次にガイド業の経営内容に関することについてみよう。

(8) 2000年の営業実績 (表5)

2000年1月から12月までの営業実績すなわち客数についての調査結果をみると、団体会員では年間500名以上が多いのに対し、個人会員ではすべて500名以下である(表5)。団体会員の中には多くのガイドを抱えているところもあるが、個人とあまり変わらないようなところもあり、従って500名以下

表5 営業実績(年間客数(2000年))

年間客数	団体会員	個人会員	計	割合
3000人以上	1		1	5.3
2000～	1		1	5.3
1000～	2		2	10.5
500～	4		4	21.1
200～	3	2	5	26.3
100～	1	2	3	15.8
50～		2	2	10.5
50人以下		1	1	5.3
計	12	7	19	100.0

という実績のところもいくつか見られる。なお、1回のツアーにおける客の人数は聞き取りを総合すると2～5名が多いようで平均すると3名程度になるものと思われる。

(9) 集客方法(表6)

集客方法の主なものは、①大手旅行会社との連携、②インターネットを通して、③島内業者や団体との契約の3つである(表6)。表6は各ガイド業者にとって50%以上の集客方法を基準に分類したものである。団体会員では①と②

表6 集客方法

集客方法	団体会員	個人会員	計	割合(%)
①大手旅行会社	4		4	21.1
②インターネット	3	1	4	21.1
①+②	2		2	10.5
③島内業者・ 団体との契約	2	5	7	36.8
④観光協会		1	1	5.3
⑤固定客	1		1	5.3
計	12	7	19	100.0

で12分の9すなわち75%を占めるのに対し、個人会員の場合は③が7分の5すなわち71.4%を占めていて最も多くなっている。これは先に見たように個人会員は団体会員のいずれかと契約していることが多いからである。団体会員と個人会員を合わせた全体では約90%が以上3つのいずれかの集客方法によっている。これ以外では「観光協会を通して」及び「固定客による」がそれぞれ1件ずつで少ない。

(10) 客の季節性(表7)

次に客の季節性すなわちガイドの忙しい時期と暇な時期について尋ねた。客の少ない月に

については12～2月が10人、1～2月が7人であり、冬に少ない点はほとんど一致した回答であった。また、6月をあげた者も2人いた。

客が多い月の方は、7～8月が6人、7～9月が5人とこの2つが最も多かったが、やや複雑だったので、各月毎にその月

を多いとしてあげた回答数の合計を表に示した(表7)。すべての回答が8月を含めていた(100%)が、次いで7月(94.7%)、9月(68.4%)と続いていた。結局、8月、7月、9月の順に多く、次いで5月に多いという結果になった。

なお、少ない月についても同様の方法により整理した結果を示しておく。

#### (1) 客の年齢・性別・居住地

まず、客の年齢では30歳前後を中心とした20代から30代にかけての若い人々と、50代を中心に40代～60代にわたる中高年の人々、の2つのグループに分けられるようだ。前者をあげた業者数は12(63.2%)、後者をあげた業者数は11(57.9%)であった。このほか、高齢者とした回答も2例あった。

次に、性別では、回答なし(2)と男女半々(2)を除く残りすべての回答(5)が女性の方が多いという内容の回答であった。また、男女比率で回答した10例によりどの程度女性が多いのかをみると、6～7割程度が女性であるという結果であった。

さらに客の居住地についての質問に対するガイド業者の回答(1業者複数回答)を集約すると、関東をあげた業者が12、関西が10で、この2つが最も多い。これに九州4、中部3、北海道2が続いている。

以上をまとめると、30歳前後と50代の女性で関東や関西から来るというタイプが浮かび上がってくる。

#### (2) 専業・兼業別(表8)

ガイド業者の専業兼業別の状況をみると、団体会員、個人会員いずれも半々くらいで兼業も意外と多かった。兼業の中身は園芸・造園業、林業、屋久杉加工業、漁業、水産加工業、レストラン・みやげ物店経営、ヒュッテ経営、スナック経営、不動産業、警備、カメラマンなど様々であり、1人がこれらのいくつかを兼ねている場合もあった。

また、ガイド業の客が少ない冬場に兼業の方

表7 客の季節性 注1)

多い月	業者数	割合(%) <sup>注2)</sup>	少ない月	業者数	割合(%)
3	3	15.8	10	1	5.3
4	5	26.3	11	1	5.3
5	10	52.6	12	11	57.9
6	5	26.3	1	19	100.0
7	18	94.7	2	18	94.7
8	19	100.0	6	2	
9	13	68.4			
10	7	36.8			
11	3	15.8			

注1) 客が多い(少ない)月について尋ね、その月をあげた業者数の合計で客の多さ(少なさ)を間接的に推測したものである。

注2) その月を多い(少ない)月と回答した業者数の全業者数に対する割合である。

表8 専業・兼業別状況

専業・兼業別	団体会員	個人会員	計
専業	6	3	9
兼業	6	4	10
計	12	7	19

を重点にする者もいた。

## 2) 被調査者の意向を尋ねた部分

以上の項目は客観的な事実に関するものであった。以下のものは主として被調査者の考え方や意見など主観的な側面についてのものである。

### (1) 営業の経過について (表9)

表9 営業経過について

プラス面	マイナス面
順調に伸びてきた	ガイドに対する認知がないので四苦八苦している
客は増加してきている	エコツアー客はごくわずかだ(3%程度か)
8年間は右上がりできた	ポイントや道路が荒れてきているので
世界遺産指定('93)以後客が増えた	立入り禁止や木登り禁止などをすべきだ
収入が増え、気分よく仕事をしている	社会経験のない出稼ぎガイドもいる
客が喜んでくれるのがうれしい	本格的なガイドの姿にはまだまだだ
いい仕事でやり甲斐がある	教員免許ぐらいは持つことが望ましいし
設備投資がなく、効率がいい	アメリカでは研究者レベルの人がやっている
自然の中の仕事で気分はよい	今まではよかったがいつまで続くかは不明
趣味と実益を兼ねていて楽しい	今後は客の数を制限し、細く長くやるべきだ
	ハウステンボス、シーガイア式では困る
	新しい参入者が多く、競争が激しくなっている
	60人小屋にトイレが1つであり、水が汚れて飲めない
	肉体的にはしんどい

これまでの営業経過とこれに関する感想についてプラス面とマイナス面とに分けてまとめた(表9)。プラス面では客数が増加し経営が順調に伸びてきている。自然の中での仕事で客も喜んでくれ、やり甲斐があるいい仕事であるなどの意見が多かった。これに対し、マイナス面では職業としての認知が確立されていないこと、多くの客が入ることにより自然が荒れてきており、人数制限等を行うべきであること、本格的なガイドの姿にはまだまだ達していないこと、新たな参入者も多く競争が激しくなっていること、さらに身体的にきつい仕事であること、などの意見や感想が述べられていた。

### (2) 客についての印象・感想 (表10)

ガイドからみた客の印象について尋ねたところ、まず一般的には、はじめてで2~3人のグループの客が多いこと、マスコミで縄文杉のみを取り上げるためか、縄文杉への日帰り客が多いことなどの特徴があるということであった。

次に客の印象でプラス面とマイナス面とに分けて整理してみた。プラス面ではゴミを持ち帰るなどマナーがよくなってきていることが述べられているが、マイナス面では2000m級の登山であるにもかかわらず軽装であったりすること、縄文杉しか関心がない客がいること、

本当の自然志向でないこと、などが指摘されている。

表10 客についての印象

プラス面	マイナス面
マナーが良い	クレームの多い人もいる
ゴミの持ち帰りなど意識は高い	学校教育が身につけていない
マナーが良くなってきている	ファッションスタイルで来る者もある
自然を求めてくる客が多い	若い人では5割が軽装(ヒール靴の人も)
ここ5~6年は意識が向上	2000m級の山という意識がなく
屋久島=屋久杉の考えが分散してきている	ハイキング程度の気持の人が多い
客からの評判はいい	自然を汚す心ない人もいる
	世界遺産指定後マナーは悪くなった
	高齢男性のポイ捨て
	縄文杉しか関心がなく、自然の説明は聞いてくれない
	ガイドからの一方通行でなく相互作用が理想

(3) エコツーリズムについて (表11)

ここではエコツーリズムをどのように捉え、どのような方向に進もうとしているのかについて考えてみたかった。

まず、自然保護を強調する考えがあった。ここには自然保護を言うなら、自分の生活から実践するべきであるとか、自然の他に民俗や文化を大切にすることも含める考えもあった。次に地域経済の向上・発展を指摘する考えがあった。ここでは屋久島ではまだあまり行われていないが、農漁業

での体験等を重視するグリーンツーリズムの方向を指摘する意見もあった。この他、客の増加により自然を荒らしているのでエコでなくエゴだという皮肉った指摘もあった。

(4) 行政や観光協会に対する要望 (表12)

行政及び観光協会に対する要望は大きく3つに分けられるものと思われる。第1は行政の

表11 エコツーリズムについての考え

自然保護	自然保護の延長だ 自然を大事にする 化石燃料も使わないことが理想でカヌーや自転車を使うべきだ 自分がエコの生活をすべきだ。魚を獲ったり、自分で家をつくるなど 自然とともに民俗や文化を大切に
地域経済	地域経済を広く巻き込むシステムづくりが必要 リピーターを増やして地域生活の向上を 自然保護協会の次の3原則が基本だ ①ローインパクト、②環境教育、③地域貢献 この3原則プラスエンターテイメントが必要だ キャンプ場などを増やすべき 体験農作業、工芸体験などを
その他	客の増加で自然を荒らしているのがエゴだ 今はブームだ 客はエコには関心がないのではないか

基本姿勢に関してで、行政は押し付けでなく民間のサポートにまわるべきとの意見である。第2は様々な制度面での要求で、その中心はガイドの資格・認定制度を設けるべきという意見であろう。この他、適切なガイド料金の設定、入山料の新設、入山制限の設定、グリーンワーカー制度の導入、ガイドの職業としての認知の推進などの要望が出されている。第3はその他の要望で、縄文杉にトイレの設置をすとか、もっとガイドに関する情報を客に伝え宣伝する、登山道の整備をガイド業者にさせる、等の直接的な要望があり、また、政治色を抜く、島民意識のレベルアップを計る、関連産業の育成に努力する、などの要望もあった。

表12 行政・観光協会に対する要望

I	行政の基本姿勢について 行政はおしつけでなくサポートに回るべき 民間先行型で 関係者が話し合える場づくりを
II	制度面での要望 認定制度を設ける。そのための研修・講習会を出稼ぎガイドが多いので緩やかな認定制度を 県知事認定でガイドの資格制度を ガイド業育成のための適正な料金の指定を 入山料を徴収し、入山制限も 環境庁のグリーンワーカー制度を進める ガイドの理念的な認知を進める
III	その他・直接的要望など もっとガイドの情報を流す もっと宣伝を 縄文杉に屋根つきトイレの設置を 登山道の整備をガイド業者に 政治色を抜いて 島民意識のレベルアップを 関連産業の育成を

(5) 自然保護及び地域経済に対する貢献度 (表13)

表13 自然保護及び地域経済に対する貢献度

	自然保護			地域経済		
	団体会員	個人会員	計	団体会員	個人会員	計
A (非常に役立っている)	4	3	7	4	1	5
B (ある程度役立っている)	6.5 <sup>注1)</sup>	4	10.5	7	4.5	11.5
C (あまり役立っていない)	1.5		1.5	1	0.5	1.5
計	12	7	19	12	6 <sup>注2)</sup>	18

注1) BとCの間との答えを0.5ずつとした

注2) 1名はいずれをも選択せず

質問項目の最後にエコツーリズムの2つの基本要素、自然保護と地域経済に関して自分たちのガイドの仕事が役に立っているか否かについて尋ねたが、この質問に関しては3つの選択肢、すなわち、A「非常に役立っている」、B「ある程度役立っている」、C「あまり役立っていない」を揚げた。結果は表13のとおりであり、いずれもBが最も多くなっている。そこで、それぞれについて理由を見よう。

① 自然保護について (表14)

Bを選択したということは、良い点もあるが悪い点もあるとの考え方であると思われる。良い点は自然の大切さについて説明し、また、自然を汚さないように努めていることであ

ろう。逆に悪い点は自然の中に入ることによって自然を壊している点であると思われる。ついでにAとCの理由も揚げたが、AはBの良い点であり、CはBの悪い点と一致していると言えよう。

## ② 地域経済について (表15)

Bの「地域経済にある程度貢献」の理由を見ると、良い点はガイド業(60~70人)が誕生し、雇用が増えたこと、交通、宿泊業など地域経済が潤っていることなどである。問題点はこのガイド業にはシーズンオフがあることの指摘であった。ついでにAとCとの理由もみると、Aはかせぎ(約4億円)が屋久島に落ちること、また、グリーンツーリズムをあげた者がいる。Cは「横着ものがしている仕事」との回答であった。

要するにBが多いのはガイド業の存在自体が地域経済への貢献であるが、グリーンツーリズムなどのより広い地域経済との結合した発展が不十分であるという判断があるからであると思われる。

## 3) 自由意見について (論点と考察)

自由意見とは、自由意見という項目を設けて尋ねたというのではなく、前述したように、筆者との会話の中で出された質問項目以外の様々な意見である。そこで、ここでは自由意見を整理するというより、この自由意見を参考にして筆者が考える問題点や論点を5点にわたって整理して述べ、若干の考察を加えることにしたい。

### (1) ガイドの人数

先にガイドの総人数について推測したが、ここで地元出身で地元詳しいI氏が80名以上と推測していることを紹介しておきたい。氏はこの内訳として「ガイド連絡協議会」加盟者

表14 「自然保護にある程度役立っている」の理由

B(ある程度役立っている)の理由	
良い点	
	自然の大切さを伝えている
	自然の説明をしている
	持ち込まない・持ち出さないの実践
	自然を利用し共生している
	ガイド付きで自然と接触する
	自然の監視をしている
問題点	
	島民から嫌われている
	自然を壊している
A(非常に役立っている)の理由	
	エコツーリズムは自然保護の延長
	環境教育をし、監視もする
	ゴミがないようにしている
C(あまり役立っていない)の理由	
	人を連れて歩くのだから自然破壊である

表15 「地域経済にある程度役立っている」の理由

B(ある程度役立っている)の理由	
良い点	
	ガイド業の誕生(60~70人)
	雇用が増えた
	交通・宿泊業など地域経済が潤っている
問題点	
	シーズンオフがある
A(非常に役立っている)の理由	
	稼ぎが屋久島に落ちる
	4億円の金を落としている
	グリーンツーリズム
C(あまり役立っていない)の理由	
	横着者の仕事

が約60人、ネイチャーガイド協会が約10人、その他が約10人としており、ほぼ確からしい数であると思われる。そして、この結果は先に行った筆者の推測ともほぼ一致している。

(2) ゴールデンウィークの縄文杉登山の制限について

現状ではゴールデンウィークには650～700人／日が縄文杉登山を行うと言われており、トイレの問題や道などの自然が荒れる問題が指摘されている。これを100～200人／日に制限すべきという意見がガイド業者から出されている。

(3) ガイドの認知の問題

この問題は料金の問題とも関わっており、統一料金の設定については反対があつてうまくいかなかったようだが、ガイドという仕事は、一定のレベルを考えれば誰にでもできるようなものではなく、ある種の基準や資格を設けて認可制にするべきであるという方向で議論がなされていることである。この問題はガイドの専門性やレベルアップとも関連している。

(4) グリーンツーリズムについて

エコツーリズムが自然を活用した地域経済の発展を目指すものであり、グリーンツーリズムが農林水産業などを活用した「観光」であるとすれば、両者は矛盾するものではなく、相補い合うものであろう。エコツーリズムを目指す屋久島にとってもグリーンツーリズムを発展させることは望ましいことであろう。

聞くところによると、屋久島でもクリーンツーリズムの実験的試みを行ったことがあるという。しかし、客に来てもらう時期がポンカンやタンカンなどの収穫の時のみであることと、収穫を客にさせる際の準備が面倒であること、さらに客が摘み取ったものは売り物にならないことなど、メリットがないということで成功しなかったようだ。

グリーンツーリズムを目指して実践している好例は宮崎県綾町の例であろう（郷田實，1998）。こうした例に学びつつ屋久島もグリーンツーリズムの方向を積極的に取り入れていくべきではないだろうか。

(5) 島の人の感情と他所から来た人との関係

元からの島民にとっては、ガイドだけがいい思いをしているという感情がある。また、外から来たある人は「よそから来て勝手に金儲けしやがって」と言われたことがあるという。外から来た者は自分たちは地域に溶け込んでいると思っているが、「島の人からみると溶け込んではいない」のである。

この問題を考える上で1つの参考となる例は川辺町の森の学校の北島氏の場合ではないかと思われる。北島氏は川辺町とは全く関係を持たないよそ者であったが、わずか5～6年しか経っていないにも関わらず、今では十分に地域に溶け込み、地区の人からも自分たちの地域の一員として受け入れられている（田島康弘，2002）。

こうした例を1つの参考として屋久島でももっと地元の人に受け入れられる方向を模索してい

くことが必要なのではなからうか。

## 第4章 結 語

本研究では、まずエコツーリズムの概念について検討し、一定の整理を行ってその到達点を示すとともに、この概念や実態をめぐっての問題点や課題について指摘した。

次いで、以上検討した概念を軸として、屋久島のエコツーリズムについて、ガイド業者に対する調査を行い、その結果から明らかになった諸事実や諸々の考え方を提示して検討した。その結果を要約すると以下のようなになるであろう。

- ① ガイド業者は屋久町とくに安房に多く、40～50代の男性が主で島外出身者が4分の3を占めている。これら島外出身者は'94～95年にガイドを始めた者が多く、'80年代末のトッピーの就航、'93年の世界遺産への登録等に伴う観光客の増加に対応している。
- ② ガイドを始める前は、観光に関連した仕事をしていた者が多かったが、ガイドを始めた動機は個人的な理由が多く、多様であることが特徴である。
- ③ ガイド業者の形態としては、数人から10人前後の会社組織または団体として活動する形態（観光協会の団体会員）と個人の形態とがあり、年間客数も前者が1,000人をこえる規模のものがあるのに対し、後者は500人以下である。1人のガイドが案内する年間客数は20人から300人程度までかなりの差があるが、一般的には100人前後が多いようだ。
- ④ グループ組織は大手旅行会社と契約している場合が多いが、中にはこうした形態を取らず、インターネットのホームページのみで営業しているところもある。
- ⑤ 客の多い月は8月、7月、9月、5月、10月の順であり、逆に少ない月は1月、2月、12月の順である。ガイド業にはかなりの季節性がある。客は女性が6～7割を占め、30歳前後と50代が多く、関東、関西などの都会からの者が多い。
- ⑥ ガイド以外の仕事もしている者が約半数いるが、これはガイドの仕事が夏期に集中するという季節性が関係しているものと思われる。
- ⑦ 経営は今のところ順調に伸びて来ているが、観光客の増加とともに、自然が荒れて来ていること、ガイド業としての認知がまだ低いことなどの問題を抱えている。また、エコツーリズムに対する考え方もガイド各人によりまちまちであり、さらに地域経済の発展にガイド業は貢献して来たが、まだまだ不十分であるなどの考えも示されていた。

今後の方向としては、自然を荒らさないことやガイド業の認知を確かなものにしていくことなどの課題もあるが、やはり地域（住民）とのかかわりが最も重要なポイントとなるのではなからうか。そのためにも、地域住民との相互理解や地域の主産業である農林水産業との連繋が重要な課題とな



るものと思われる。

## 謝 辞

本研究を進めるに当たり、屋久島観光協会の方々、および多くのガイド業者の方々には、大変お世話になった。日本地理学会の巡検でもお世話になった大山勇作氏をはじめとした各ガイド業者の方々の親切な応答無しには、本研究を遂行することはできなかった。また、鹿児島大学農学部 of 石黒助教授、環境庁屋久島世界遺産センターの東岡氏には調査の便宜をはかっていただいた。以上の方々に対し、心から厚く御礼申し上げます。

## 注

- 1) 1998年3月環境と観光の調和ある発展をめざし、旅行者、地域住民、研究者、旅行業者、行政等が一堂に会して誕生した民間の団体。2002年7月、日本エコツーリズム協会（JES）と改名。
- 2) 『エコツーリズム－その可能性と困難性』の著者。エコツーリズムという用語を冠する書籍を最初に出版した人とされる。
- 3) 「エコツーリズム国際相談計画」理事。「国際自然保護連合」の仕事にも関わる。1980年代後半、エコツーリズムという用語をはじめて使用した人とされる。
- 4) 1949年に結成された民間の自然保護団体。会員数は約16000人。
- 5) 財団法人自然環境研究センター理事。
- 6) 財団法人日本自然保護協会総務部長。
- 7) 国際自然保護連合が主催し、1992年2月ベネズエラで開催された第4回世界国立公園保護地域会議のこと。

## 文 献

- 海津ゆりえ・真板昭夫 1999. What is eco-tourism?. 「エコツーリズムの世紀へ」(エコツーリズム推進協議会編), 18-35, エコツーリズム推進協議会, 東京.
- 郷田 實 1998. 結の心, 241頁, ビジネス社, 東京.
- 国際観光振興会 1992. 国際観光情報 274号, 59頁, 国際観光振興会, 東京.
- TAJIMA, Y. 2001. Yaku : Island on World Heritage List. In : Beyond Satsuma. (Ed. AOYAMA, T), 40-51, Kagoshima University, Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima.
- 田島康弘 2002. 鹿児島県川辺町における住民の「まちづくり」について. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 53 : 49-59.
- 日本自然保護協会 1994. NACS-J エコツーリズム・ガイドライン. 93頁, 日本自然保護協会, 東京.
- 真板昭夫 1999. エコツーリズムの役割. 「エコツーリズムの世紀へ」(エコツーリズム推進協議会編), 221-223, エコツーリズム推進協議会, 東京.
- 吉田正人 1992. エコツーリズムは開発途上国の保護地域を救えるか?. 自然保護, 360.